

目次

凡例	.....	iii
評釈	.....	
はしがき	.....	2
〔春歌〕	.....	5
夏歌	.....	76
秋歌	.....	115
冬歌	.....	175
賀歌	.....	226
恋歌	.....	308
索引	.....	
引用和歌作者索引	.....	437
引用和歌初句索引	.....	443
あとがき	.....	451

## 凡例

一 本『長秋詠藻全評釈』上中下三巻は、いわゆる第二類本『長秋詠藻』のうち、俊成自撰部分四八〇首の全評釈を試みたものである。自撰部分の後に加えられている「右大臣家百首」一〇〇首は、仮名に適宜漢字を当てると読みやすいよう整えた本文のみを、先に刊行した『長秋詠藻全評釈』下巻（武蔵野書院、二〇一八・三）に掲出するとどめた。また、自撰部分四八〇首の後にある奥書も本文のみを同書に掲出するとどめた。本中巻は、同じく先に刊行した『長秋詠藻全評釈』上巻（武蔵野書院、二〇二一・八）と『長秋詠藻全評釈』下巻とを繋ぐ、中巻にあたるもので、いわゆる部類歌群のうちの四季歌・賀歌・恋歌の部の評釈である。

二 『長秋詠藻』の本文は、『私家集大成』第三巻・中世Ⅰ（明治書院、昭和四十九・七）に、『俊成Ⅰ』として収められたものを底本とした。該本は、俊成自撰の原型本四八〇首に「右大臣家百首」一〇〇首を加えた五八〇首よりなる第二類本『長秋詠藻』にあたり、藤原定家筆本の臨写本である宮内庁書陵部蔵『長秋詠藻』（五〇一・一七二）を忠実に翻刻したものである。なお、本文の確認には、国文学研究資料館のマイクロフィルムによる同本の紙焼写真本を用いた。本評釈においては、『長秋詠藻』の書名を用い、他の諸本との区別が必要な場合などは、適宜、「私家集大成『長秋詠藻』」の略記号を用いる。本文における巻数の見出しは「上」「中」「下」であるが、正確を期し「上巻」「中巻」「下巻」と表記した。

三 本文の表記は私意によって改めたが、底本の表記が再現できるように左のような操作をした。

1 仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一し、歴史的仮名遣いでないものは振り仮名として残した。歴史的仮名遣いと異なる仮名に漢字を当てた場合は、「おを惜しむ」・「をわと音」の如く、先ず底本の仮名を振り仮名として残しその下に（ ）として歴史的仮名遣いによる仮名を記した。

2 仮名には適宜漢字を当てたが、もとの仮名は振り仮名として示した。おどり字を通行の文字に改めた場合は、もとのおどり字は振り仮名として示した。

3 漢字に対して私意により振り仮名および送り仮名を加えた場合は、それらを（ ）に入れて底本の表記と区別した。

4 私意により仮名に濁点をほどこした。

5 底本にない文字を補った場合は、「」を付して補い、補ったことを注記した。

四 校異は重要と思われるものを記すこととし、活字化されている『長秋詠藻』諸本の名称は以下の通りの略称に従い、影印本を閲する場合にも以下の通りの略称に従った。

・ 『藤原俊成全歌集』（松野陽一・吉田薫氏編、笠間書院、平成十九・一）所収『長秋詠藻』（第一類本）↓  
『全歌集』『長秋詠藻』（「第一類本」の語で示す場合もある）。

・ 日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』（久松潜一氏他校注、岩波書店、昭和三十九・五）所収『長秋詠藻』（第二類本系統）↓  
『古典大系』『長秋詠藻』（「底本の性格と校訂の方法」において、第三類本の静嘉堂文庫蔵『長秋詠藻』および第四類本の六家集による『続国歌大観』によって校訂をした旨を記している）。

・ 冷泉家時雨亭叢書『中世私家集』四（朝日新聞社、平成十二・二）所収『長秋詠藻』（第二類本系統）↓  
『冷泉叢書』『長秋詠藻』。

・ 「第二類本」の語で、「私家集大成』『長秋詠藻』『古典大系』『長秋詠藻』『冷泉叢書』『長秋詠藻』を一括して示す場合もある。

・ 『新編国歌大観』第三卷（角川書店、昭和六十・五）所収『長秋詠藻』（第三類本系統）↓  
『新編大観』『長秋詠藻』（凡例において、「本文の偶然的な脱落・衍字・誤写などが他本によって修正しうる場合は校訂を行った」

旨を、解題において、「校訂には書陵部蔵『長秋詠藻』(五〇一・一七二)(第二類本に相当)および陽明文庫蔵『長秋』(二八・二二)(第二次増補部分)を用いた」旨を記している。

和歌文学大系『長秋詠藻 俊忠集』(川村晃生氏他校注、明治書院、平成十・十二)所収『長秋詠藻』(第三類本系統) ↓和歌大系『長秋詠藻』(凡例において、専修大学蔵『長秋詠藻』を校合本に用いたことを記している)

・ 『第三類本』の語で、新編大観『長秋詠藻』と和歌大系『長秋詠藻』を一括して示す場合もある。二書の本文の漢字や送り仮名が違う場合は、分かりやすい方を利用する。また、両書の共通の底本である国立国会図書館蔵『長秋詠藻』(寄別五二、三二七)を国立国会図書館デジタルコレクションによって閲する場合、その書名を「第三類本」の底本」と略称する。

・ 与謝野寛氏他編『長秋詠藻 山家集』(日本古典全集刊行会、昭和二・四)所収『長秋詠藻』(第四類本系統) ↓古典全集『長秋詠藻』(解題において、「宮内省本」を対照し異同を挙げたことを記している。歌番号は付されていない)。

・ 松下大三郎氏編『続国歌大観 歌集』(角川書店、昭和三十三・三(初版)／昭和五十一・八(七版))所収『長秋詠藻』(第四類本系統) ↓続大観『長秋詠藻』(第二類本にある六六番歌が欠のため、以後の歌番号が他のものと異なる)

・ 『第四類本』の語で、古典全集『長秋詠藻』と続大観『長秋詠藻』を一括して示す場合もある。二書の本文の漢字や送り仮名が違う場合は、分かりやすい方を利用する。

五 【評】の最後に勅撰集と俊成存命中の私撰集・歌論書等への入集の有無をあげる。俊成没後の私撰集等への入集については記さないことを原則としたが、それらに入集して異文があるような場合は注記する。

六 引用和歌その他の語句にしばしば傍線を施したが、特にことわらない限り全て筆者が付したものである。

七 文献の引用および略称について

・ 『長秋詠藻』の諸本を引用する場合は、二および四に記した略称を用いる。

・ 日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』所収の『長秋詠藻』に施された頭注および補注を引用する場合は、「古典大系『長秋詠藻』」の略称を用い、和歌文学大系『長秋詠藻 俊忠集』所収の『長秋詠藻』に施された脚注を引用する場合には、「和歌大系『長秋詠藻』」の略称を用いる。

・ 岩波書店の日本古典文学大系・新日本古典文学大系・日本思想大系に収録された書は、「古典大系『書名』」「新古典大系『書名』」「思想大系『書名』」の略称で引用し、小学館の日本古典文学全集・新編日本古典文学全集に収録された書は、「古典文学全集『書名』」「新編古典文学全集『書名』」の略称で引用し、明治書院の和歌文学大系に収録された書は、「和歌大系『書名』」の略称で引用し、表記に際して適宜漢字を当て、作者名や書名等は通称を用いた。

・ 和歌の引用は、特にことわらない限り株式会社古典ライブラリーの『日本文学 Web 図書館』を利用し、適宜漢字を当てて引用した。また、引用書名は通称により、作者名には適宜漢字を当て、氏名ともに記す場合、名だけを記す場合など私意によった。必要に応じて、『新編国歌大観』所収本は「新編大観『書名』」の略称を、『新編私家集大成』所収本は、「新編私家集大成『書名』」の略称を用いる。歌合に関して、『日本文学 Web 図書館』を利用する外、萩谷朴氏編『平安朝歌合大成』を利用する場合は、増補新訂版（同朋舎出版、全五巻〈平成七・五〇八・十二〉）により、『新訂・歌合大成一〇五』の略称を用いる。

・ 『万葉集』の引用は、日本古典文学大系により、歌番号もこれによった。引用本文には適宜漢字を当て、作者名は適宜通称を用いた。

歌論書等の引用は、主として風間書房『日本歌学大系』正編および別巻により、引用本文には適宜漢字を当てた。引用に際しては、「歌学大系『書名』」の略称を用いる。その他の場合は、その時々々に注記する。

北村季吟著の『八代集抄』の引用は、『八代集全註』（山岸徳平氏編、有精堂出版、昭和三十五・七）により、『八代集抄』の略称を用いる。

歌題の解説は、多く『歌ことば歌枕大辞典』（久保田淳氏他編、角川書店、平成十一・五）、『歌枕歌ことば辞典増訂版』（片桐洋一氏、笠間書院、平成十一・六）を参照し、適宜書名だけを明記した。

歌語・歌枕・歌人等の解説は、多く『歌ことば歌枕大辞典』、『歌枕歌ことば辞典増訂版』、『和歌文学辞典』（有吉保氏編、桜楓社、昭和五十七・五）、『和歌大辞典』（犬養廉氏他編、明治書院、昭和六十一・三（平成八・三、第4版））、『和歌文学大辞典』（同編集委員会編、古典ライブラリー、平成二十六・十二）、『平安時代史事典』（古代学協会古代学研究所編、角川書店、平成六・四）、『国史大辞典』（同編集委員会編、吉川弘文館、昭和五十四・三（平成九・四））により、適宜書名だけを明記した。

仏教用語の解説は、多く『佛教語大辞典』〔縮刷版〕（中村元氏、東京書籍、昭和五十六・五）、『佛教大事典』（吉田紹欽氏他編、小学館、昭和六十三・七）、『例文仏教語大辞典』（石田瑞磨氏編、小学館、平成九・三）、『岩波仏教辞典』（中村元氏他編、岩波書店、平成一・十二）により、適宜書名だけを明記した。

『法華経』本文の引用は、『妙法蓮華経』を原文・訓読文対照した『法華経』三冊（坂本幸男・岩本裕氏、岩波書店、上中下（昭和三十七・七、三十九・三、四十二・十二））により、『岩波・法華経』の略称を用いる。『大無量寿経』『阿弥陀経』『観無量寿経』の引用は、『浄土三部経』二冊（中村元氏他訳註、岩波書店、上下（昭和三十八・十二、三十九・九））所収の本文（漢文）とその訓読文により、『岩波・大無量寿経』『岩波・阿弥陀経』『岩波・観無量寿経』の略称を用いる。源信作『浄業和讃』は、高野辰之氏編『日本歌謡集成』第四

卷（東京堂、昭和十七・六）所収の『浄業和讃』により、『源信・浄業和讃』の略称を用いる。なお、他の仏教經典を『大正新脩大藏經』によって見る場合、「『經典名』（大正藏、卷数、No.〈数字〉）」で記した。

語句の意味については、多く小学館『日本国語大辞典』（第二版）、小学館『古語大辞典』（中田祝夫氏他編、昭和五十八・十二）、角川学芸出版『角川古語大辞典』CD・ROM版（『角川古語大辞典』編集委員会、平成十四・二）、大修館『大漢和辞典』デジタル版（諸橋轍次氏他編、令和一・十一）により、適宜書名だけを明記した。

・ 『新訂増補国史大系』（黒板勝美・国史大系編修会編、吉川弘文館）所収の古記録類を参照・引用する場合、『公卿補任』・『尊卑分脈』・『本朝世紀』など適宜書名だけを明記し、いちいちの書誌は省略に従った。

#### 八 研究文献・論文・注釈書の引用について

評釈中にしばしば引用する研究文献の一覧とその略記号を以下に記し、いちいちの注記は省略に従った。また、単行本に収載された論文についても単行本を引用の拠り所とし、論文の初出等をいちいち記さなかった。ここに多くの先学の恩恵を蒙ったことを謝したい。なお、以下の研究文献を含め、他にも多く研究文献・論文を引用させていたのだが、引用に際しての敬語は省略に従った。

・ 日本の古典Ⅱ『和泉式部・西行・定家』（河出書房新社、昭和四十七・十）所収、大岡信氏訳「長秋詠藻」↓  
「大岡氏・長秋詠藻」

・ 『藤原俊成の研究』（松野陽一氏、笠間書院、昭和四十八・三）↓『松野氏・俊成の研究』

・ 『新古今歌人の研究』（久保田淳氏、東京大学出版会、昭和四十八・三）↓『久保田氏・新古今歌人の研究』

・ 『六家抄』（片山享氏・久保田淳氏編、三弥井書店、昭和五十五・一）↓『片山氏他・六家抄』

・ 『谷山茂著作集二 藤原俊成人と作品』（谷山茂氏、角川書店、昭和五十七・七）↓『谷山氏・藤原俊成』

- ・ 『谷山茂著作集 三 千載和歌集とその周辺』(谷山茂氏、角川書店、昭和五七・一二) ↓ 『谷山氏・千載集とその周辺』
- ・ 『谷山茂著作集 六 平家の歌人たち』(谷山茂氏、角川書店、昭和五九・一一) ↓ 『谷山氏・平家の歌人たち』
- ・ 柳澤良一氏 『久安百首』における藤原俊成の漢詩文撰取について(国語と国文学、昭和六一・十) ↓ 『柳澤氏・俊成の漢詩文撰取』
- ・ 『堀河院百首全釈』 上下(滝澤貞夫氏、風間書房、上下〈平成十六・十、十六・一一〉) ↓ 『滝澤氏・堀河全釈 上下』
- ・ 『久安百首全釈』(木船重昭氏、笠間書院、平成九・一一) ↓ 『木船氏・久安全釈』
- ・ 『千載和歌集』(上條彰次氏、和泉書院、平成六・一一) ↓ 『上條氏・千載集』
- ・ 『新古今和歌集全注釈』全六卷(久保田淳氏、角川学芸出版、平成二三・十〜平成二四・三) ↓ 『久保田氏・新古今全注釈 一〜六』
- ・ 『新勅撰和歌集全釈』全八卷(神作光一・長谷川哲夫氏、風間書房、平成六・十〜平成二〇・六) ↓ 『神作氏他・新勅撰全釈 一〜八』
- ・ 『新勅撰和歌集』の各種古注の引用本文は、特にことわらない限り全て大取一馬氏 『新勅撰和歌集古注釈とその研究』 上下(思文閣出版、昭和六十一・三) 所収の各注釈によった(契沖の 『新勅撰集評注』 ↓ 『新勅撰』、北村季吟の 『新勅撰和歌集口実』 ↓ 『新勅撰・口実』、梅水堂正路の 『新勅撰和歌集抄』 ↓ 『正路・新勅撰抄』、作者未詳の別本 『新勅撰抄』 ↓ 『別本・新勅撰抄』、弄花軒祖能の 『新勅撰和歌集抄』 ↓ 『祖能・新勅撰抄』)。



- ・ 『続古今和歌集全注釈』（木船重昭氏、大学堂書店、平成六・一）↓『木船氏・続古今全注釈』
- ・ 『玉葉和歌集全注釈』全三巻・別巻（岩佐美代子氏、笠間書院、平成八・三）八・十二）↓『岩佐氏・玉葉全注釈上』別
- ・ 『風雅和歌集全注釈』全三巻（岩佐美代子氏、笠間書院、平成十四・十二）十六・三）↓『岩佐氏・風雅全注釈上』下
- ・ 『国文学に摂取された仏教』（間中富士子氏、文一出版、昭和四十七・十二）↓『間中氏・国文学に摂取された仏教』
- ・ 『釈教歌の研究―八代集を中心として―』（石原清志氏、同朋舎出版、昭和五十五・八）↓『石原氏・釈教歌の研究』
- ・ 『類題法文和歌集注解』全四冊（塚田晃信氏編、古典文庫、昭和六十・十一）↓『類題法文集注解一』四
- ・ 『上代倭絵全史』（家永三郎氏、墨水書房、昭和四十一・五）（改訂版）↓『倭絵全史』
- ・ 『校注歌枕大観 近江篇』（森本茂氏、大学堂出版、昭和五十九・三）↓『校注歌枕・近江』
- ・ 『和歌の歌枕・地名大辞典』（吉原栄徳氏、おうふう、平成二十・八）↓『和歌の歌枕・地名』
- ・ 角川日本地名大辞典25 『滋賀県』（角川日本地名大辞典）編纂委員会編、角川書店、昭和五十四・四）↓『角川・滋賀県』
- ・ 日本歴史地名大系第二五巻 『滋賀県の地名』（平凡社地方資料センター編、平凡社、一九九一・二）↓『平凡社・滋賀県』
- ・ 『中世和歌の生成』（渡部泰明氏、若草書房、平成十一・一）↓『渡部氏・中世和歌の生成』
- ・ 『和歌のアルバム 藤原俊成 詠む・編む・変える』（小山順子氏、平凡社、平成二十九・四）↓『小山氏・藤原俊成』

原俊成』

・ 『藤原俊成』（渡邊裕美子氏、笠間書院、平成三十・十二）↓『渡邊氏・藤原俊成』

・ 『藤原俊成 中世和歌の先導者』（久保田淳氏、吉川弘文館、令和一・十二）↓『久保田氏・俊成（中世和歌の先導者）』

・ 『藤原俊成』（人物叢書 新装版、久保田淳氏、吉川弘文館、令和五・二）↓『久保田氏・俊成（人物叢書）』

・ 『長秋詠藻全評釈』上巻・下巻（拙著、武蔵野書院、二〇二一・八、二〇一八・三）↓『長秋詠藻全評釈 上下』